

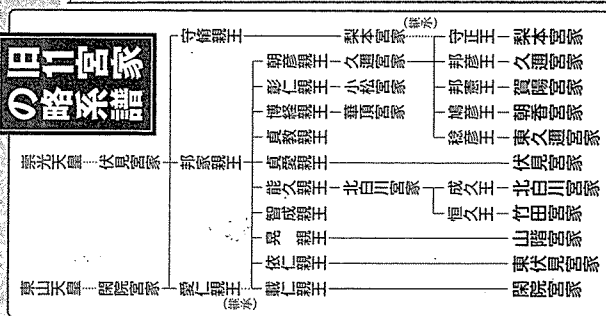
# 急浮上する「旧皇族」！ 「女性天皇」VS. 「東久通」

特集

## いよいよ始まる「皇位継承」議論

▲交配率 ▲ベール ▲上皇

### 旧皇家の略系譜



人が勤務していたことでも知られる山階鳥類研究所の理事長の任にある。『世俗まみれ』との論議を超越するやんごとなき職位にあるわけで、この基博氏の長男と次男の家庭にも、それぞれ10歳前後の男児がいる。

### 決意を固める若者も...

さらに信彦氏の下の弟である眞彦氏(66)は玉川大農学部を卒業後、伊藤ハムに入社。長男は住宅建材商社に勤め、やはり高校生の男の子が。さらにもう一人、眞彦氏の孫には男児がいるという。

「おそろく抵抗感も薄まるのではと思います」さらには、こう指摘する。「かつて皇室には『世襲親王家』が四家あり、天皇家に男系の血筋が途絶えた際、その家から天皇を出してきました。まさしく、血のりい、で、戦後はGHQの意向によって失われてしま

つたこの仕組みを、再び作るべきです。新たに復帰させる皇族を秋篠宮殿下の次の世代、悠仁親王をお交えする20代以下の男子に絞れば、国民の理解も得やすいのではないのでしょうか」

その手順として、前述の安倍首相の論文にもある「養子」を挙げるのだが、「現代に強制結婚などあり得ませんから、内親王や女王と一緒にするという意味では決してありません。まずは宮家に養子入りし、独立する時にはその宮家を継ぐ、あるいは新たな宮号を置くなどの方法があるでしょう。皇室典範で養子が禁止されているのは、一つは皇族が増えすぎて皇族費が枯渇する恐れがあったから。今は減少が危ぶまれているのだから、禁止は不要だと思います。実際に、旧宮家の若い男性の中には『いざとなれば……』と、決意を固めている人もいます」

つまり安倍政権は、20代以下の男系男子のいる四つの旧宮家に思いを定め、中でも東久通家をクローズア

ていくばかりだ。野党第一党の立憲民主党は、女性・女系天皇容認に向けて国会論戦の展開を明言しており、政府与党もこの問題を放置

## 狙いは「オーソライズ」

1947年、GHQの意向もあつて旧宮家51人が皇籍を離脱した。すなわち伏見、閑院、久通、山階、北白川、梨本、賀陽、東伏見、朝香、竹田、東久通の各宮家である。すでに断絶の憂き目に遭った家もあるが、2700年にわたり連綿と受け継がれてきた皇統の「Y染色体」を有する未婚男子は、複数の家庭に存在する。首相自身、かつて野党時代にはこんな論文を寄せていた。以下「文藝春秋」2012年2月号より抜粋する。

「敗戦という非常事態で皇籍を離脱せざるを得なかつた旧宮家の中から、希望する方々の皇統復帰を検討してみてもいいだろう」

するわけにはいかない。で、その打開のための『秘策』として安倍首相が提唱するのが、旧皇族の復帰プランである。

を受け入れ、宮家を継承していく方法もある。現行の皇室典範では、皇族は養子をとることができないことになっているが、その条文だけを特別措置によつて停止せればよい」

さらには、〈敗戦後長きにわたつて民間人として過ごされた方々が急に皇族となり、男系男子として皇位継承者となることに違和感を持つ方もおられよう。そうした声が強ければ、皇統に復帰された初代に関しては皇位継承権を持たず、その次のお子さまの代から継承権が発生するという方法も考えられよう。実際に、安倍首相のブレーンである八木秀次・麗澤大教授は、こう明かすのだ。「実は、有識者会議の結論はすでに見えています。そ

ップさせ、意見集約していく狙いがあるというわけだ。とはいえ、間もなく始まる議論では、80%を占める「女性天皇」容認の『世論』と対峙する格好になる。皇室制度に詳しい所功・京都産業大学名誉教授は、「皇室典範の規制を緩和するため、今や与野党の大多数が合意できる改革案を提案する段階にあると思います。政府の考え方は『男系男子』を前提としているようですが、それよりは『男系男子を優先して男系女子も一代限りで容認する』という案が現実的だと思います」

とした上で、旧宮家の復帰については、「古来皇室を離れた子孫の皇統復帰は、旧皇室典範の増補でも禁止されています。したがって、本質的には好ましくありませんが、皇統減少の危機を克服するため、旧宮家の復帰も必要ならば、一般国民たる当人と本人の意向や資質などを具体的に確かめてほしいと思います」

急浮上した当の東久通家。前出の眞彦氏に聞くと、困惑気味に。「特にお話することはございません」と言うのみ。また王生氏の長男も、10代の息子を持ちながら、「取材は結構です」と、足早に立ち去つていった。代わつて、3月に旅立つた当主・信彦氏の長年の友人が明かすには、「皇統復帰について彼は『自分たちには関係ないことだからノークラスだ』と話していました。戻りたい。と希望するのと言語通断だと考えていて、そもそも復帰すること自体が通うのではない、今の皇室の流れの中で継承していくのが一番ではないか……そんな思いを抱いていました」

が、自ら死に込めはできずとも、制度を整えはそ